

# カンバン方式を用いた学内アジャイル開発におけるプロジェクト推進への取り組み

富田 邦宏<sup>1</sup> 合田 壮汰<sup>1</sup> 米谷 雄介<sup>1</sup> 末廣 紀史<sup>1</sup> 武田 啓之<sup>1</sup> 山田 哲<sup>1,2</sup> 浅木森 浩樹<sup>1,2</sup> 八重樫 理人<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 香川大学情報化推進統合拠点DX推進研究センター <sup>2</sup> 株式会社リコー

## 1. はじめに

- ・ 香川大学DXラボは、香川大学のDX推進に資する様々な活動を実施している
- ・ 香川大学では、**MVPを特定し検証する仮説検証型アジャイル開発**によって業務システムを内製開発している
- ・ 業務システム内製開発プロジェクトの進捗管理は、定例会議と議事録（テキストベース）によっておこなわれていた
- ・ 香川大学DXラボ全体のプロジェクト数や、各プロジェクトの状態（経過週数など）が**正確に把握されておらず、他のチームメンバーやプロジェクトマネージャーから支援を受けづらい**などプロジェクトの遂行に課題があった

## 2. 香川大学DXラボ プロジェクト推進ルール

香川大学DXラボはプロジェクトを円滑に進めるため以下のプロジェクト推進ルールを定めた

- ① システム開発にかかる打ち合わせは、**最大4回**
- ② 初回打ち合わせから、プロト開発→実証実験→運用開始までは**1ヶ月**
- ③ 運用開始時は、事業部門主体で運用する
- ④ 初回打ち合わせ時、**プロジェクトのラフな完成イメージ**を共有する

本ルールは以下の効果をねらっている

- ・ 短期間でリリースすることをルールにすることで、要求元と開発メンバーが**MVPを意識して開発を進めるようになる**
- ・ 初回打ち合わせでのプロトタイプ共有をルールにすることで、要求元と開発メンバーとの間で**合意形成がおこないやすくなる**



図1 チーム定例と議事録

## 3. カンバンの設置

- ・ **プロジェクトの進捗状況が見える化し、開発担当者だけでなくDXラボメンバー全員が進捗を把握できることをねらって、情報化推進統合拠点のオフィスの入り口にカンバンボードを設置した**
- ・ 週初めとDXラボ定例会議前に、カンバンの写真をTeamsで共有し、DXラボメンバー全員のプロジェクトの進捗状況に対する認識を統一することで、**メンバー同士でサポートし合ってプロジェクトに取り組むチーム作りに貢献している** (例：技術検証フェーズで停滞していたら、技術支援をおこなったり、現在の機能がMVPかどうかの検討・協議をおこなう)



図2 情報化推進統合拠点にて設置されているカンバン



図3 Teams上で共有されるカンバン

## 4. まとめ

- ・ カンバンの設置により、各プロジェクトの進捗状況をメンバーが認識し、**開発者がプロジェクト推進ルールを意識して開発をおこなうようになった**
- ・ プロジェクトの状態の見える化により、今までプロジェクトマネージャーがおこなってきた感覚的なマネジメントではなく、**データに基づいたプロジェクトの推進に取り組もうとしている**
- ・ 現在、**プロジェクトデータの生成とナレッジの蓄積に向けた電子カンバンの実装**について検討している